
呪いをかけられて

夢月@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪いをかけられて

【Nコード】

N9978V

【作者名】

夢月@

【あらすじ】

クリスティアーナの街は呪われた。

ある者は母国を捨て、ある者は金を求め、ある者は放浪の先に辿り着いた地。

呪われた街を舞台とした物語。

1 クリスティアーナに立つ

クリスティアーナの地を踏んだ時、風が頬を撫でた。ようやく、一週間の船旅が終わるのだ。そう思えば気分が高揚するのもつかの間、すぐに目眩が私を襲った。

「クレア様っ！ 無理をなさらないでください！ さあ、すぐに宿の方へと参りましょう」

隣に居たローザがすぐに私の体を抱きとめた。ローザは心やさしい娘だ。私は心配をかけないために笑った。

「大丈夫よ。ねえローザ、しばらくクリスティアーナの街を見回りたいの」

「もう、クレア様ったら。だめですよ、休まなくちゃ」

そういうと、ローザは宿屋の方へと歩き出した。母国に居た頃よりもローザは積極的に見える。

宿屋に着くと、すぐに私はベッドに倒れこんだ。家のベッドに比べると固いが、窮屈な船旅よりだいぶました。

「クレア様、フォールティアの国に戻れるといいですね」

椅子に腰かけていたローザが伏し目がちに呟いた。

「そうね。でもローザと一緒になら不安なんてないわ」

「クレア様……」

ローザは照れたように笑った。この気持ちは本心だったが、一方

で国に残っている家族や友人を思うと胸が締め付けられる。未だに、
フォールティアを襲った悪夢が脳裏によみがえるのだ。

私の異変に気付いたのか、ローザは私を心配そうに見つめていた。

「ねえ、お腹がすかない？ クリスティアーナは料理が有名だから
楽しみだわ」

わざと明るい声でいえば、ローザはほっとしたようだった。

これからは強く生きたいと、切実に願った。

1 クリスティアーナに立つ（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございます（ゝωゝ＊）
二作目投下ということで、こちらのほうが亀更新です。

2 悪夢

まるでそれは夢のようなできごとだった。いつものように、私は自室で本を読んでいるとどたばたと足音が聞こえてくる。私はそのことに眉をひそめつつ、扉を開けた。

「いったい何ですか？ お兄様」

廊下に居たのはお兄様だった。お兄様の顔はどこか暗い影をおとしていた。よほど焦っているのだろう、お兄様はとびかからんとするぐらいの勢いで私の肩を掴んだ。

「よく聞きなさい、クレア。敵国が攻めてきた。このままではここも陥落するだろう」

お兄様の表情は真剣だった。私は叫びたいのをこらえて、唾を飲み込む。

「クレア、お前はローザと共に逃げろ」

「そんなっ……！ 私だけ逃げるなんて……っ！ お兄様はどうするのですか!?!」

「俺は……」

そこでお兄様は言葉を切った。

「王を守るのが、俺の仕事だ」

お兄様は誇らしげに笑っていた。お兄様は大変殿下と仲が良く、それでいて愛国心も強かった。

「でも、私だけなんて……」

「だからこそ、だ。クリスティアーナの街に行け。そこで、チェロという宿屋がある。そこには——」

「まずい、火事だ！ 火の矢が飛んできたぞ！」

遠くで、お父様の叫び声がきこえてきた。お兄様は私の手をひっぱると、窓の方へと駆け寄った。そしていきおいよく窓から外に飛び出した。ここは一階でよかったと安堵する。

安堵したのもつかの間、前を見ればもう火の手がまわっていた。お気に入りの庭園が、全て燃えている。空はもう夕暮れで、炎の赤と空の赤が溶け合い、それは恐ろしい光景だった。よくみれば、遠くの街並みも赤く染まっていた。

「ここです！ 馬を用意しました。さあ、クレア様、お乗りください」

「ローザ！ どこにいる！」

いつのまにやら、侍女のローザが馬に乗って来た。私は言われるままに馬にまたがる。

「行きます！」

私達は、火の海を馬で駆けて行った。もうそこはのどかな街ではない。恐怖が私の頭の中を支配した。敵国の騎士が来た道とは反対方向の、暗い森の中を通る。森の暗さは、私の未来を暗示するかのようには思えた。蹄の音と、私達の息遣いだけがきこえる。夜の帳がおりるまえに、なんとしてでもこの森を抜けたかった。

「クレア様。この後は、港へ向かいます！ 港はまだ支配の手は及んでいません」

「……わかった」

「さあ、今日中にこの森を抜けましょう！」

空には一番星が浮かんでいた。獰猛な獣がこの森に住んでいないとは言い難い。

しばらくすると、出口が見えてきた。もう夜に近かった。

「お身体どうですか？」

森を抜けると、しばらくして大きな一本の木があった。近くに川もあり、休むのに適していたので、馬を一旦休ませることにした。

ローザは心配そうに私の顔を覗きこむ。

「大丈夫よ。心配しないで」

「もう、そんなこといってクレア様が倒れたら私はどうしたらいいか……」

「……大丈夫よ」

自分に言い聞かせるように静かに呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9978v/>

呪いをかけられて

2011年11月16日02時34分発行